

慶良間諸島のシカ

伊澤 雅子
琉球大学理学部生物学科

Deers in the Kerama Islands

M. Izawa

ケラマジカとは？

慶良間諸島に住むケラマジカ *Cervus nippon keramae* は、奈良公園や宮島などの風景でおなじみのニホンジカ *Cervus nippon* と同じ種である。ニホンジカは日本のみならずベトナム、中国東部、台湾、朝鮮半島にも分布している。日本には、北海道のエゾシカ *C. n. yesoensis*、本州のホンシュウジカ *C. n. centralis*、九州のキュウシュウジカ *C. n. nippon*、対馬のツシマジカ *C. n. pulchellus*、馬毛島のマゲシカ *C. n. mageshimae*、屋久島のヤクシカ *C. n. yakushimae*、慶良間諸島のケラマジカの7亜種が分布している。身体サイズや角の大きさは北に住む亜種ほど大きい。

この中でケラマジカは他の6亜種とは異なる履歴を持っている。それは、他のシカがそれぞれの生息地の土地亜種であるのに対して、ケラマジカは移入種であるということである。ケラマジカについて言及されている最も古い文献は首里王府編の「琉球国由来記、巻四」(1713)である(高良 1965)。これには崇禎年間(1628~1640)に尚氏金武王子朝貞が薩摩からシカを持ち帰って慶良間の古場島(現在の久場島?)に放したと記録されている。鹿児島からであれば、おそらくキュウシュウジカかヤクシカ、またはマゲシカを連れてきたのであろうと考えられる。移入の目的は記されていないが、1875年に慶良間を視察した河原田成美の記録によれば、王府時代に慶良間からケラマジカを藩王に献上していたとのことである。厳密には現在慶良間諸島に生息しているシカがこの時移入されたシカの子孫であるとは言い切れないが、その後の記録や琉球列島の動物相から推察しても、そう考えて差し支えないだろう。



ケラマジカのオス

このシカは“島渡り”(泳いで島間を移動をすること)をすることで有名で、泳いでいるのが目撃されたり、時には泳ぎ疲れて漁師の船に助けられたりということもある。そうして、350年間に久場島からあちこちの島に広がっていったのであろう。ケラマジカは1955年に琉球政府の天然記念物に、また、復帰の1972年に座間味村屋嘉比島、慶留間島を生息地として国の天然記念物に指定され、保護されている。

このような特殊な経緯を持つケラマジカについて、1992年度より文化庁・沖縄県教育委員会・座間味村の委託による調査の一環として、また、「屋嘉比島の動物を中心とした生態系調査」プロジェクトとして世界自然保護基金日本委員会の助成を受け(本プロジェクトは屋嘉比島の海洋生物・陸上生物の総合調査として実施している、亀崎 1994 参照)、生態・行動に関する研究の部分を九州大学 土肥昭夫氏ら、分類形態学的研究の部分を琉球大学 太田英利氏ら、植物相に関する研究の部分を富山県立中央植物園 兼本正氏らとチームを作り、学術調査を開始した。

本稿では、まだ、結果を総合的に報告するにはい

たらないが、ケラマジカの学術的興味と分布・個体数について述べてみたい。

ケラマジカ研究の問題点

ケラマジカは天然記念物として保護されているが、その生息状況と生態に関する調査は1970年代に行われたもののみで、その後は地元あるいは来島者から断片的な情報が得られているにすぎない。現在の生息状況を把握し、保護の対策を検討することが急務であることはいうまでもない。しかし、同時にケラマジカについては生態学的に興味深い点がいくつかある。

まず、このシカが移入種であるという点である。ケラマジカがもともとどの亜種であったかはまだ確定していないが、いずれにせよ温帯林で生息していた個体群からのものである。その一部がいきなり亜熱帯の環境に移入され、そのまま350年の間に個体群を安定させ、維持してきたことになる。シカは草食獣であるので気候帯による植物相の違いは直接にその生活史の各パラメーターに影響するはずである。このシカが新しい環境にどのように適応して生き延びてきたのか、その過程で他の生息地のシカと生活史や形態のどのような点が違ってきているのか、非常に興味深い。小動物であれば移入実験や飼育下での操作も可能であるが、大型哺乳類でこのような偶然の実験が行われたことはチャンスであるといえるだろう。

第2に、シカ類は本来森林から草原生活へ移行してきた動物であり、それと共に身体的大型化、単独生活から群れ生活への展開など変化を遂げてきた動物群である。ニホンジカについてはこれまで多くの研究がなされ、その繁殖行動や社会性が論じられてきた。しかし、それらの研究の場は、奈良県奈良公園、宮城県金華山、広島県宮島など、生息地としてはかなり開けた草原であった。始原的な生活環境であった森林では彼らはどのような生活をしているのだろうか。近年、長崎県野崎島においてニホンジカ

の調査が進み、それまでの研究とはかなり異なった結果が得られてきた。特に、その社会構造や繁殖システムに従来の研究に見られるようなきちんとしたタイプが認められず、かなりルーズな形が確認された。野崎島は森林に覆われているという点が他の調査地とは大きく異なっている。ケラマジカの生息地も亜熱帯の森林であり、草原と呼べる場所はほとんどない。また、屋嘉比島の場合には人為的な影響をいっさい排除できるという利点もあり、ニホンジカの森林における生態を探り、森林から草原への変化の様相を推理するには絶好の対象となる。

ケラマジカの分布

1975-1978年に座間味村・沖縄県によって実施された生息実態調査では、最初に放逐された久場島では確認されず、屋嘉比島、阿嘉島、慶留間島の3島で約60頭生息していると推定された(沖縄県座間味村1976、沖縄県教員委員会1977、1978、1979)。最も個体数の多かったのは屋嘉比島で、生息頭数は約30頭と報告されている。



阿嘉島の湿地に現れるメスグループ

今回の調査ではこの分布は大きく変化していた。まず、前回多くとも30頭以下であった阿嘉島で個体数が増加していた。阿嘉島ニシハマビーチ近くの湿地はシカにとって良質の餌と水の得られる場としてよく利用されており、同時に調査者にとっても見通しがよく、観察しやすい場である。個体数をカウントすると、その場所だけで同時に最大70頭が確認さ

れた (當間 1995)。この湿地は阿嘉島のケラマジカ
個体群のかなり多くの部分が集中している場所では
あるものの、他の地区に点在する個体も確認されて
いる。その分を考慮すると、少なくとも 100 頭以上
が阿嘉島に生息していることになり、この 20 年間に
4 倍以上になったと考えられる。屋嘉比島と慶留間島
については直接カウントできる場所がないため、鳴
き声、食痕、皮剥ぎ・角とぎ跡、糞などから推測す
る方法をとっている。慶留間島については今の所資
料不足であるが屋嘉比島は阿嘉島と逆に減少傾向に
あると考えられる。

また、前述の 3 島の他に外地島、座間味島、渡嘉
敷島でもシカが目撃されている。外地島は慶留間島
と橋で結ばれており、慶留間島との交流も考えられ
るが、座間味島、渡嘉敷島では目撃例も少なく、た
まに泳ぎ着いたものが目撃されたただけであるかも知
れない。



ケラマジカの食痕 (屋嘉比島)

屋嘉比島の個体数はなぜ減ったか？

屋嘉比島のケラマジカの個体数がこの 20 年間減少
傾向にあった理由については、現在の所推測の域を
出ないが、いくつかの仮説は考えられる。一つの可
能性はケラマジカ個体群自体が持つ個体数変動の一
部であるということである。そうであればいずれま
た回復してくることになる。そうでない場合として
は、環境の大きな変化が挙げられる。以前屋嘉比島
に鉾山があり人が住んでいた時期には、家や学校な
どもあり、低地部にはかなり開けた草地や畑がそう

である。そのような場所は現在の阿嘉島の湿地と同
様ケラマジカにとって良好な餌場であったことだろ
う。ところが屋嘉比島の鉾山が閉山となり、無人島
になってから、低地部はアダンに覆われていった。
前述の 20 年前の調査時の
写真と現在の屋嘉比島の
写真と比較してもその景
観の変貌は著しい。その過
程で、ケラマジカは良質の
生息地が減少し、個体数が
減ってきたかも知れない。
そうであれば、環境に適し
た密度で最終的には安定
することになるだろう。最
後に、最も懸念される可能
性として、鉾毒の影響がある。屋嘉比島は銅山であ
ったため、閉山後も島の水質がシカにとって安全な
ものであるかどうかについては疑問が残る。この点
は、屋嘉比島のケラマジカ個体群の絶滅に結びつき
かねないことであるので、早急な分析が必要である。



ケラマジカの角とぎ・皮剥ぎ
跡 (慶留間島)

参考文献

- 亀崎直樹 1994. 屋嘉比島を中心とした慶良間諸島のウミ
ガメ類の産卵状況調査. みどりいし, (4): 4-7.
- 沖縄県座間味村 1976. 天然記念物ケラマジカ調査報告
書 (). 屋嘉比島のケラマジカ. 64pp.
- 沖縄県教育委員会 1977. 沖縄県天然記念物調査シリー
ズ 17 集. ケラマジカ実態調査報告 (). 148pp.
- 沖縄県教育委員会 1978. 沖縄県天然記念物調査シリー
ズ 17 集. ケラマジカ実態調査報告 (). 209pp.
- 沖縄県教育委員会 1979. 沖縄県天然記念物調査シリー
ズ 12 集. ケラマジカ実態調査報告 (). 148pp.
- 高良鉄夫 1965. ケラマジカ実態調査. 琉球政府文化調査
報告, pp. 100-104. 琉球政府.
- 當間順一 1995. 阿嘉島に生息するケラマジカ *Cervus
nippon keramae* の生息状況と繁殖行動. 琉球大学理
学部生物学科卒業論文. 44pp. ケラマジカ実態調査
報告 (). 148pp.